

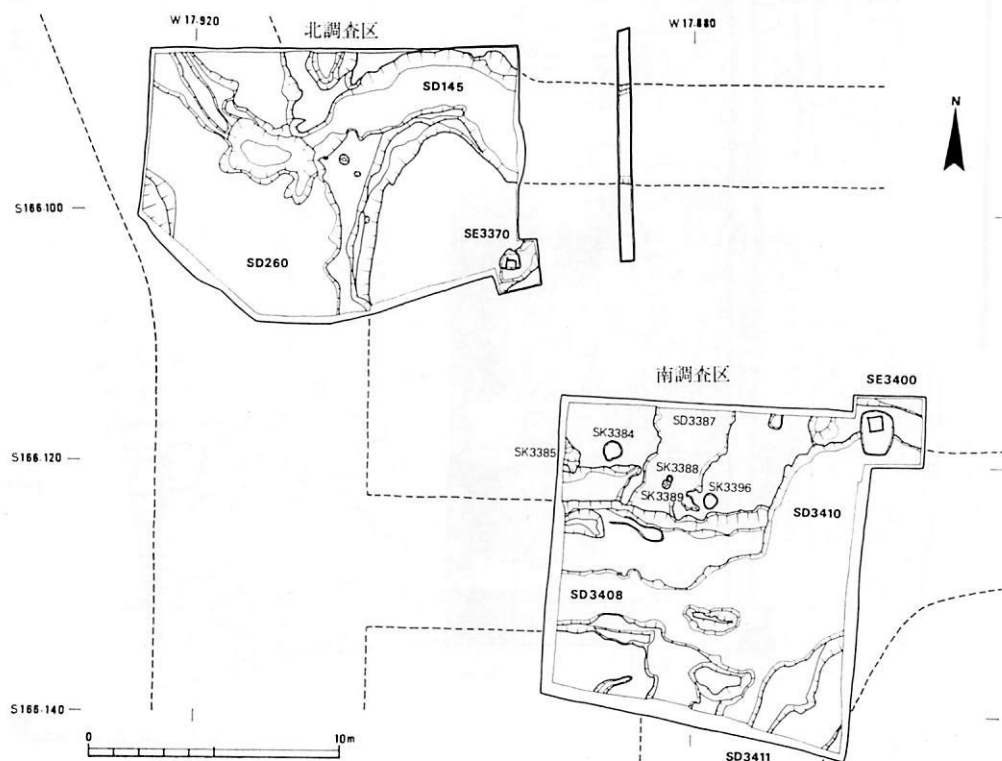
藤原宮跡の調査

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

1 藤原宮西北隅（第36次）の調査

この調査は、藤原宮四至確認調査の一環として、宮北面・西面外濠の交点推定地（北調査区）と、北面と西面大垣・内濠の交点推定地（南調査区）において実施した。この一帯は宮域内で最も標高の低い地域で、現地表面で宮西南隅より約7m、北面中門より約2m低い。検出遺構の時期は、藤原宮期から奈良・平安時代にわたる。

藤原宮期の遺構には、北調査区で検出した宮外郭施設の北面外濠・西面外濠がある。北面外濠SD145は素掘りの東西溝で、幅7.5m、深さ1.7mである。約16m検出したが、この間は北へ約4m大きく湾曲している。堆積土は3層に分かれ、中層は灰色粘質土、下層は灰色砂であり藤原宮期から奈良時代前半の遺物が出土した。特に奈良時代前半の土器が多く、他に瓦類、題籤、削り掛け、曲物、陶硯、土馬、墨書土器、菫筒、漆塗盤、鉄鎌、鎌釘などがある。上層は茶褐色土であり平安時代初頭の土器を含む。濠が奈良時代前半でその機能を失った後、平安時代に入って埋め立てられた状況を示す。西面外濠SD260は素掘りの南北溝で、約21m検出した。濠は13世紀まで存続しており、その幅は掘削当初より広がったと推測される。西岸は調



藤原宮西北隅（第36次）調査遺構図

査区外である。幅 17m 以上、深さ 1.5m で、S D145 と合流後、北西へ向きを変える。堆積土の下層からは、藤原宮期から 11 世紀、上層からは、13 世紀までの遺物が出土した。出土遺物には瓦・土器の他に木筒削屑、鷗尾、陶硯、土馬、墨書土器、帯金具などがある。

奈良時代の遺構には、北調査区東南隅の井戸 S E 3370 がある。この井戸は方形横板組で、一辺 0.8m である。井戸枠は南辺を省略し、北辺の東西に隅柱をたて、横板を積み上げている。深さは 1m である。井戸枠内から奈良時代前半の土器類、漆塗柄の刀子などが出土した。

平安時代の遺構には井戸・土壇がある。南調査区東北隅の井戸 S E 3400 は方形横板組で、一辺約 1m である。井戸枠は、縦方向に溝を削った四隅柱に横板を落し込んでいる。横板は 5 段残り、深さは 1.1m である。底面は小石を敷いている。井戸枠内の遺物は長大な木筒 2 点の他、削り掛け、横櫛、曲物、銭貨（富寿神宝）、墨書土器、土師器杯、灰釉椀などごく少量である。このうち木筒の 1 点は、ある荘園での稲の出納を弘仁元年（810）10 月から同 2 年 2 月にわたり詳細に記録したもので極めて貴重な史料である。南調査区の河川北側の土壇 S K 3384・3385・3388・3396 からはいずれも 12 世紀の土器が出土した。

南調査区の大半が河川流路にあたる。河川 S D 3410 と 3411 が合流し、西方への河川 S D 3408 となる。S D 3410 の北岸に掘削された井戸 S E 3400 の年代から、河川は平安時代初頭以前から存在していることが明らかである。河川幅は 11~15m、深さ約 1.6m である。堆積土の下層には藤原宮期から 11 世紀、上層には 13 世紀までの遺物を含む。それ以後、この地域は水田となったと推測される。S D 3408 と S D 260 から同一個体の緑釉瓶が出土しており、平安時代に河川 S D 3408 が S D 260 に注いでいたのは確かである。出土遺物には多量の瓦・土器の他、陶硯、土馬、墨書土器、花卉をかたどり金メッキを施した金銅製蝶番、鉄製鋤先、銭貨（乾元大宝）、砥石などがある。また、牛・馬骨が出土した。S D 3387 は S D 3408 に注ぐ南北河川である。

今回の調査により、藤原宮西北隅の状況がかなり明確になった。北面外濠と西面外濠との合流点を検出したことにより、宮の西北隅の位置が定まった。外濠は合流後、北西方向に流路をとり、宮外に抜けることがわかったが、現地形・条坊位置などからすると、西二坊大路東側溝へ注ぐことが考えられる。南調査区に想定した大垣・内濠は検出できなかったが、これは河川の形成時期と関連する問題で、宮以前からの河川であれば、大垣がこの地点まで延びていないことも考えられ、周辺での今後の調査が待たれる。また、宮以降のこの一帯の利用状況についていくつかの点が明らかになった。北面外濠から奈良時代前半の土器類が多量に出土したことは、すぐ南にある、ほぼ同時期の井戸 S E 3370 の存在と合わせて、宮廃絶直後の状況を示している。西面外濠はこれまでの調査で 11 世紀頃まで存続したことがわかってきたが、今回は 13 世紀頃までの遺物が出土しており、これは東から注ぐ河川と一体となっていたためと考えられる。井戸 S E 3400 から出土した弘仁銘木筒は、宮廃絶後の具体的な土地利用に関して重要な手懸りを与えるものである。この一帯が早い時期に荘園化したことがわかるとともに、井戸の存在から、この周辺に荘園管理施設の遺構が想定されることとなった。（安田龍太郎）

2 藤原宮西北隅井戸出土の弘仁元年銘木簡

こしばかり飛鳥藤原地域では木簡の出土は不作であった。昭和 57 年度も殆どみるべきものがないままに終るかにみえた。ところが年度末最終になって、藤原宮第 36 次調査の発掘区の壁に露出していた井戸枠を掘りひろげて調査したところ、方 1 m の井戸内から若干の遺物にまじって 2 点の長大な木簡が出土した。なかでも次頁に積文を掲げたものは、1 簡で 700 字以上もある従来類例をみない内容豊富なものであり、発掘直後にも大きな関心をよんだ。

井戸は藤原宮西北隅の近くで検出したものだが、掘形に含まれる土器から掘削年代は平安時代初頭と推され、また埋没年時は本木簡の年紀が弘仁元年であるほか、他簡の「六年」も弘仁 6 年とみてよく、また弘仁 9 年初鑄の富寿神宝があるなど出土遺物の年代から判断して、弘仁年間をそう下らない時期とみられる。従ってこの井戸は短期間の利用で廃棄されたものである。

さて問題の木簡は、長さ 98.2cm、幅 5.7cm、厚さ 0.5cm で、檜の板目をを用い短冊形につくっている。木簡の現状は左側の一部を欠くほかはほぼ原状をとどめており、墨書の遺存状況も比較的良好である（口絵参照）。記事は表から裏へつづく一連のものであるが、表上半部の「使石川魚主」までと以下では筆は異なる。表下半から裏へつづくやや細字の一連の記事は、5 カ月間の月ごとの記録であるが、この間の筆は似ていて、同一人による記録かとも考えられるが、なお断定はむずかしく今後検討を要しよう。

文面は某庄の弘仁元年 10 月の稲の収納とその後翌年 2 月までの支出に関する記録でいわば出納簿である。某庄を文面から特定することはできないが、文中に「宮所庄」（裏 4 段目）なる庄園名がみえ、同庄の必要物資を本庄の稲をもって購入しているから、本庄が宮所庄と深い関係（領主は同じか）にある庄園であることはまちがいない。因みにこの木簡が出土した場所から 700 m ほど東南の藤原宮域内に「宮所」という小字名がある。また、本庄の領主は不明だが、稲収納の行われた即日に葛木寺に 20 束を進めていることからすると、葛木寺に関係のある氏族、端的にいえば葛木氏が想定できるかもしれない。なおここにみえる葛木寺は、平城京左京五条六坊に所在したとされる奈良時代建立の葛城寺ともとれるが、橿原市和田町の高市郡所在の古い葛木寺と解されぬこともない。同寺は木簡出土地から南へ 2 km の場所にある。

木簡が出土した井戸を含め近傍に某庄所（庄園の現地管理事務所）が存在したとする推定は妥当であろう。京都からやってきた収納使石川魚主によって弘仁元年度の本庄の収穫量が検収されて木簡に記録され、それにつづいて以後翌年 2 月までの諸支出（義倉・租穀・祭祀料・田作料・出挙等）が月別に記入されている。わずか 3 町 6 段余の小規模庄園であるが、大部分が佃（直営田）経営に依存している点が注目され、また支出の記載も詳細なもので、請作者はもとより耕作者や糙女・車引までが登場し、さらには本庄をめぐる領主側の動きも判明するなど、従来この時期の庄園経営については史料を欠いていただけに貴重なものといえる。また、弘仁元年 9 月には大和も舞台になった藤原薬子の変がおこっていることが注意される。なお、他の木簡には「春京上米」のことがみえる。

(表)

弘仁元年十月廿日收納稻事
合壹千五百(秋束)口口

(刻線)

山田女佃二町六段千二百卅三束又有收納帳

凡海福万呂佃四段地子六段二百五十二束

口口 收納帳

同日下廿束

葛木寺進者

定残千四百八十玖束 淨丸福丸等

使石川魚主

上三月丸第口建丸

(刻線)

○弘仁元年十月廿六日下冊七束五把

義倉粗一石四升料十六束

十三束粗料別束八升

一束粗女功食料

二束運人功料

庄垣作料十束(五)

主国下坐御波多古入白米五斗 更十二月廿五日下午

料稻十三束(二束精代)

白米運夫功二束

小主并從経日食一束五把

合下冊七束五把

残稻一千四百卅一束五把

元年佃三町六段百廿步

自庄造二町六段百廿步

福万呂作四段又地子六段同租上

二不得八定田三町百廿(歩)

可上租穀四石五斗四升料類五十六束八把(別束)得八升(別)

糙女九人別人籍五斗功食四束五把(五)

裏薦四枚編并繩續人食一束

正倉院運并上日正倉出納又口口又口口

(裏)

口口口束

糯米春料一束酒口口

祭料物并同料菁奈等持夫功一束

依門(成)事太郎経日食二束

庄内神祀料五束

口口口(年田作料)

凡海加都岐万呂十束

民淨万呂三束

人々出舉給十七束

建万呂妻淨継女二束

大友三月万呂二束

口口口(雙)

節料物并久留美等持行夫功一束

小主并從経八日二束六把(自十二月廿日迄廿七日)

合下百八十七束九把

残稻一千二百五十三束六把

口口口一束

○弘仁二年正月廿六日下百五十七束之中

在庄東廊口口又口束

口口口進丁京持行人功食一束

又在奈良馬船并厨子棚板及步板等

宮所庄持運車引建万呂六箇日

食并酒料三束日別一升六合食

又酒日別一升

口口口(買)人々冬衣口直錢代沽百五十三束直錢廿三貫七百十五文

口口口廿日下二百卅三束八把之中

二年田作料且下百十八束(受山田女)残百八十束

又凡海福万呂所佃作口冊束依負下了(料)

小主給出舉廿五束

凡海国人出舉口(束)

同福万呂出舉給廿口(束)

依口口事小主并從経

十四日自正月廿日始迄二月三日

食箱四束二把

二郎并從一日半食六把

在奈良馬船并厨子棚又步板直二貫五百口代沽十六束 残八百卅束八把

又下廿束葛木口等料(寺)

又下二束奈良在材木運車刺油四合直口錢百七十文別冊文

又下二束人酒手料建万呂口(受)

合下四百十二束八把

1982年度飛鳥・藤原宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査回数	調査期間	面積	備考
6 A J J · C	藤原宮 第36次	82.11.17~83. 5.18	1220 m ²	西北隅
6 A J G · B	藤原宮 第36-1次	82. 9. 1~82. 9. 2	18 m ²	東方官衙
6 A J F · T	藤原宮 第36-2次	83. 1. 7~83. 1.10	9 m ²	西方官衙
6 A J H · T	藤原宮 第36-3次	83. 1.11	3 m ²	右京七条一坊
6 A J N · K	藤原宮 第36-4次	83. 2.16~83. 2.17	54 m ²	一条大路
6 AMF · N	藤原宮 第36-5次	82. 5.15~82. 5.17	20 m ²	左京十条三坊
6 AMG · H	藤原宮 第36-5次	82. 5.15~82. 5.17	20 m ²	左京十条三坊
6 AMF · H	藤原宮 第36-6次	82.12.17~82.12.20	14 m ²	八条大路
6 AMD · U	飛鳥浄御原宮推定地	82. 4.21~82.10.23	1200 m ²	石神遺跡第2次
6 AMD · U	飛鳥浄御原宮推定地	82. 6.14	2 m ²	石神遺跡西方
6 AMD · V	飛鳥浄御原宮推定地	82. 9.30~82.12.17	760 m ²	水落遺跡第3次 整備
5 ATN · H	田中宮推定地	82. 9.13~82. 9.22	57 m ²	
6 AML · J	田中宮推定地	82.12.23	4 m ²	
5 BYD · L	山田寺 第4次	82. 8.23~83. 1.27	600 m ²	東回廊・寺域東限
5 BAS · P	飛鳥寺	82. 5.18~82.12. 8	650 m ²	寺域東北隅
5 BAS · D	飛鳥寺	82. 9.29~82.10.14	18 m ²	南石敷広場
5 BAS · E	飛鳥寺	82. 5.10~82. 5.17	8 m ²	寺域西限付近
5 BAS · J	飛鳥寺	82. 5. 6	3 m ²	寺域西限付近
6 BTK · K	大官大寺 第9次	82. 7.20~82.12. 9	920 m ²	寺域東北隅
6 BHQ · E	檜隈寺 第4次	82. 7. 5~82.12.17	370 m ²	講堂北方
6 BHQ · C	檜隈寺 第4次	82. 9.13~82.12.17	230 m ²	門・東回廊
6 BHQ · B	檜隈寺 第4次	82.12. 2~82.12.14	51 m ²	金堂東方
6 AMC · N	奥山久米寺	82. 8. 9~82. 9. 2	145 m ²	寺域南方
5 BOQ · J	奥山久米寺	82.12.14~82.12.16	6 m ²	塔東南方
5 BOQ · K	奥山久米寺	82.12.17~82.12.22	6 m ²	寺域南限付近
6 AMC · F	奥山久米寺	83. 2. 3~83. 2. 4	8 m ²	寺域東南方
6 BKH · F	川原寺	82. 7.13~82. 7.23	40 m ²	南門東南方
6 BKH · H	川原寺	82. 5.17	1.2 m ²	東門東北方
6 AKI · G	橘寺	82. 5.17	1.5 m ²	
6 AKI · N	橘寺	82. 5.17~82. 5.19	8 m ²	
6 AMK · A	豊浦寺	82. 8.30	3 m ²	